

---

Precious Melody -2nd Stories- (番外編)

七海くれは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Precious Melody - 2nd Stories -  
(番外編)

### 【Nコード】

N42050

### 【作者名】

七海くれは

### 【あらすじ】

『Precious Melody - 2nd Stories』の登場人物がそれぞれ語る短編集。7色の光が虹となり、未来を切り開く。

## Chapter 1：入試まで

お、番外編？ なに、オレがしゃべっちゃっていいの？

……おおつと、シヤキつとしねえと顔がゆるんで仕方ないや。  
それじゃどうぞ！

「……決めた！ オレ、大学生になろう！」

音遠ちゃんと付き合うようになってから、オレはもつと彼女と一緒にいる時間を増やしたいと思うようになった。

そのためにはやっぱ、彼女と同じ場所にいられるようにすりゃいいじゃん！ って考えた。

一年遅れだけど、大学に行こうとしたのにはそんな背景があったわけ。

いやー、短絡的だねえオレって。でも、それがオレの持ち味だと思ってる。

そんなわけだから、その事をみんなに提案してみた。

「というわけなんだ。頼むっ！ オレに勉強を教えてください！」

「もちろん協力するの〜 みさきちゃんにも手伝ってほしいの」

「音遠ちゃんに頼まれちゃー、断るわけにいかないじゃん！」

「本当か！？ ありがてえっ！」

「まーねン。でもカン違いするんじゃないわよ！？ アタシはねえ、音遠ちゃんのために仕方なくやるんだからね！ そこんとこ理解するよつに！」

「へいへい。そういうことにしときます」

「……でもさ、アタシらだけで大丈夫かね？ おんなじガツコ行ってるの他にもいるから、みんなで協力したほうがいんじゃない？」

「そうだね。絵実梨さんとか芽衣ちゃんとかでしょ？」

「そそ。……そーいや、ちょうど5人よね。だったら曜日ごとに担

当事者変えて、それぞれ得意なものを教えていくみたいな形式取るってのどう?」

「わあ〜! それ賛成! じゃーさじゃーさ、みんなに連絡しよーよ!」

「あ、その辺はアタシやつとくから、音遠ちゃんは翔司とごゆる〜っくりね。そんじゃーね!」

とりあえず提案してみたものの……みさきにも言ったのはちょっとマズったかな?

オレは音遠ちゃんを抱き寄せると、彼女はこう言ってきた。

「でもビツクリしちゃったう。いきなり大学受けるーなんて。やりたい事、見つかったの?」

「いんや、まだ。ただ……やっぱ音遠ちゃんと一緒にいたいって気持ちが先行してるだけ。んでもね、自分のやりたい事を大学で探すつてもアリかと思うんだ」

「アリというか、みんなそうだと思うよ? 私だってそうだもん」

「まあ、オレも音遠ちゃんと付き合う以上はフラフラしてちゃいらんねーからな。自分のやりたい事を模索してる間はなんつーか、成長できてると思うし」

「翔司くん……。私、応援するからね。がんばってね」

言いながらオレにキスをする音遠ちゃん。オレ……絶対合格してやるぜ!

それからしばらくして、『オレを絶対に合格させる隊』という奇妙なネーミングの5人組が結成され、曜日ごとに担当者を代えてオレに勉強を教えてくれる事になった。

初日である月曜日はみさきの国語。

受験する科目は国語と英語の2教科。

学部も音遠ちゃんと同じにしたかったから、必然的にこうなったんだ。

「それじゃーこれ、やってみて。過去問よ。時間は50分! はい

スタート！」

「ちょ、ちょっと待てよ！ いきなりこんなの出来るわけねーだろ！？」

「文句言わない！ アタシと同じトコ行けなくていいの！？」

「お前とじゃねー！ 音遠ちゃんだ！」

「バカチン！ アタシもあの娘も同じ学部だっつーの！」

「うっ……。そ、そうだった……。っけ？」

「ほらほら、もう一分経ったわよ！？」

「マジかよ！ オレ、頑張るぜ！」

「あつははは、ホントアタタってわっかりやすいのね。ん〜じゃアタシがいると集中できないだろうから席外すわ。そんじゃーね！」  
そう言い残しながら、みさきはオレの部屋を出て行った。

……。しめしめ、こーゆーの見てもいいんだよな？ いねーってことは……。んじゃちょっと失礼して……。

とその時！ いきなりドアが開けられた！

「……とでも言うと思った！？ 誰も見てなかったら不正しちゃうじゃん！ ほら！ 今だって堂々とやろうとしてるし！」

「うへー、厳しい……。」

「グダグダ言わない！ やるのかやりますなのかはつきりしなさい！」

「いや、両方とも同じだし！」

月曜日はそんな感じで、騒がしく進んでいった。

火曜日、この日は芽衣ちゃんの英語だ。

この時の芽衣ちゃんはピンク色のフレームのメガネをしてて、なんか印象が違ってた。

「つーかメガネっ娘ですか？ 誰を萌えさすつもりですか？ いつからあなたはそんなキャラになったですか？ それでいいのか一作目のヒロイン。」

「まずは英語に対する恐れをなくしていこうね。What you

「r name?」

「え……えつと……。My name is Syouji……?」

「Very good! なんだ、大丈夫じゃない」

「いや、こんくれー出来なきゃいくら何でも……」

「え? 圭輔くんに聞いた話だね、『翔司は中学一年生レベルの英語すら怪しい』って……」

「あ……あの野郎! 今度会ったら脳を乾燥機にかけてやる!」

「どうどう。……じゃわりと大丈夫ではあるんだね? 準備していいよかったよ、こんなこともあるうかと」

芽衣ちゃんはカバンをゴソゴソやって、何かカードを取り出した。

……その後はあまり聞かなかったことにしよう。

「芽衣ちゃんの、単語テスト」

頬に人差し指を当ててポーズを取りながら、いつもよりかわいい声で何か言ってる。

照れているのか、その顔はちょっと赤く染まっていた。

「……恥ずかしくない?」

「ちよつとだけ……」

「じゃあやんなよ……とは思っても、口には出さないのだ。先に進まないから。」

水曜日は周一の国語……なんだけど、こいつなんにも準備してないんだって! マジかい!

「で、お前は何してくれんの?」

「あー……いつけね。なんにも準備してねえや」

「はあ!? おいおい勘弁してくれよ。こっちゃん時間ねえんだって」

「知るか。元から俺はあまり乗り気じゃなかったんだ。芽衣の奴がどうしてもって言うから……」

「ふ〜ん……。お前さ、芽衣ちゃんには逆らえないの?」

「認めたくねーけど、そう見えるんなら仕方ない……」

「じゃーさ、お前のこといろいろ教えてよ。こうして知り合ったのも何かの縁なんだからさ。オレも話すから」

結局この日は、周一とだべってるだけで何にも進まなかった。こ  
ういう日が1日くらいあっても……いいよな？

木曜日。絵実梨さんの英語だ。

ていうか、この人のテンポに合わせるのってメツチャ疲れる！

よく果緒梨ちゃんは一緒にいて疲れないな〜って、感心しまつ  
たよ。

「それじゃ〜これ〜、センター試験の問題やってね〜」

「は、はい」

「これ〜、こないだの問題だから〜。私も一緒にやるから〜、点数  
勝負しようね〜」

「え、始めちゃっても……」

「いいよ〜。スタート〜！」

気の抜けたスタートの合図と共に、オレらは並んで今年のセンタ  
ー問題に取り組んだ。

……っはー！ できるかこんなもの！ わかんねーところ飛ばし  
まくって……終わった！

「よし！ 終わりましたよ絵実梨さん！ ……って、あれえ？」

「う〜、翔司くん早すぎるよ〜。まだ大きな2番までしか行ってな  
いよ〜。まだ時間あるから〜、見直しでもしたら〜？」

「そ、そうです……ね」

言われるがまま、オレは答案を見直した。うへえ、空欄ばかりだ。  
……待てよ、もう少し考えてみたら出来るんじゃない？

そうだよ、テストってのは終わった時間を競うものじゃない、点  
数が重要なんだよ。

時間かけてでも確実にやった方がいいじゃん。……そうとわかれ  
ば、見直しだ！

しばらく見直ししてたら、タイマー代わりにしてた目覚ましが鳴

る。終わりの合図だ。

「あゝ、終わった。じゃあゝ、答えあわせするよ。これ、解答ね。とりかえっこして採点するから、そっちちょうだい」

「あ、はい」

オレらは用紙を交換して採点をする。

……正解、正解、正解、正解！

「ちょ、絵実梨さんすげえ！ なんだこの 嵐は！ 現役でも浪人生でもないのにこれって……」。

採点を全部終えて、合計点は？ …… 185点！？ マジかよ！

「絵実梨さん、終わりまし……って、あれえ？」

「うゝ、だから早すぎだっば。まだ半分も終わってないよゝ」  
「……」

それから10分後、ようやく絵実梨さんもオレのテストの採点を終えて、自分の手元に用紙が帰ってきた。

オレの点数は……げ、74点！？ ダメじゃんオレ！ 100点以上も差がついたとかどんだけだよ！？

「これじゃ、ちよつと厳しいね。いっぱい勉強しなきゃね。でも私、結構取れてよかった」

「ちえっ……」

そして金曜日。音遠ちゃんの国語だ。

「私は文法とか漢字を中心にやるよ。それじゃ……これやってね」  
「うん。……これって、手作り？」

「そうだよ。翔司くんのためにがんばったんだよ？」  
「嬉しいなあ。じゃあオレもすげー頑張るぜ！」

さっそく問題に取り組みオレ。正直あまりキレイな字じゃなかったけど、音遠ちゃんがオレのために頑張ってくれたんだからオレもそれに応えないと！

「っしや、終わった！ 音遠ちゃん、採点頼む！」

「お疲れ様！ 頑張ったね」



「そりゃな……やっぱ、音遠ちゃんと同じとこ行きたいしな」

「うん……。私も、翔司くんとおんなじ学校がいいの……」

音遠ちゃんはオレに近寄り、抱きついてくる。そして……頭を撫でられた……。

「頑張つてね……。なでなで……」

「音遠ちゃん……」

「絶対合格してね……」

「ああ、もちろん。約束するよ」

オレも彼女を抱き返す。

「にゃう……」

「キス、していい……？ 絶対に合格するっていう、誓いのキス……」

「どうぞなの……」

オレはゆっくりと彼女の口をふさぎ、しっかりと抱きしめる。

「大好き……」

「ありがとう……。オレも……なでなでしてやるよ……」

彼女の2つに結ばれた髪に優しく触れ、感触を確かめる。さらさらとして、愛おしい。

「うきやあ……。音遠、幸せだう……。なでなでしてもらってるなの……」

そのまま……2人だけの幸せな時を過ごした。

オレは彼女を、オレの持ちうる最大の愛で包み込んであげた。

そこ、採点はどうしたとか聞くな。このあとちゃんとしてもらったんだから。

と、そんな感じで勉強は進み、いよいよ受験日当日だ。

会場には『オレを絶対に合格させる隊』の5人も来てて、直前までオレを励まし続けてくれた。

「ここまで来たら、もう頼れるのは自分だけよ！ 悔いなんて残しちゃダメだかんね！」

「ま、せいぜい頑張るこつたな」

「翔司くんなら大丈夫だよっ！ 自分を信じてね！」

「早く終わらせるのもいいけど、ちゃんと見直しするんだよ？」

「翔司くん……。私、信じてる」

「みんな……。今までありがとう。絶対に満足いく結果を残してみせるよ！」

オレはゆっくりと背を向け、会場に向けて歩き始める。オレ……絶対に勝つ！

そして数日後、オレはその手に大きな封筒を携えて、大慌てでHexagramのドアを開ける。

「はあ……はあ……はあ……」

「いらっしやい。どうかした？」

「み……みんなは？」

「みんな？ そっち」

マスターの指差す方には、やはりいつものメンバーがたむろしていた。

「み……みんな！ 聞いてくれ！ つーか見てくれ！」

「お、翔司？ どうした？」

「……まさか！？」

「そう。……そのまさかだ！！！」

オレは後ろ手に持っていたその封筒を頭上に掲げる。もちろんこれは……大学の合格通知だ！

大切な書類は家に残し、合格通知書やパンフレットのみを入れて持ってきた。

「うおおお〜！！ すごい！ すごいぞ翔司！ やったなコンチクショ〜！」

「さすがでっす翔司さん！ 愛の力は、大学合格まで引き寄せちまうんでっすね！ 有言実行に、男の中の男を垣間見たでっす！ オレっち……アンタを尊敬しまっす！」

「よかったな、おめでとう！ 学校でも姉貴と仲良くやってくれよな」

「本当に……おめでとうございます。やはり貴方は、やればできる殿方でしたのね」

「翔司さんすつごお〜い！ おめでとうございませす！」

「おめでとーなのです！ くすだまはどこです？」

「やったね！ おねーちゃんも喜んでるよっ！」

「僕からも言わせて欲しい。……本当によくやった。これからの人生は、キミのものだ。誰のものでもない、キミ自身のオリジナルだ。どんな風に色づけしようとする自由だよ」

「オレ自身の……オリジナル……か。はは、なんかいきなりそう言われても実感が湧かないよ」

「それはこれからイヤでもわかるよ。そしてそれがわかる頃……きつとキミはここから巣立っているだろう。だが僕はいつでも、ここ Hexagramで待っているよ。みんなの帰りを、ね」

「ま……マスター！ それに……みんな！ ありがとう！ オレ……すげー嬉しくて……。うっ、ぐっ……！」

こみ上げてくる熱いものを抑える事もせず、オレは感情に任せて泣きじゃくった。久々の涙だ、止まんねえ……。

そんな中、静かにドアを開ける音が響き渡る。現れたのは、音遠ちゃんだった。

「翔司くん……！」

オレは涙を拭いて、彼女に合格通知を見せる。

「音遠ちゃん……。オレ、やったよ。合格した。4月からおんなじ学校に通えるよ」

「うん……。うん……。私……嬉しすぎてなんて言ったらいいか……」

「オレも……わかんないや。でも、それでもわかる事はあるよ」

「なあに……？」

「オレが、ここに居ること。みんなが居ること。そして……オレに

は音遠ちゃんがいること。これだけは未来永劫、どこに行っても変わらない……よな？」

「……うん！ 変わらない！ ずっと……ずっとみんな一緒！ そして……私と翔司くんもずっと一緒！ ……だ〜い好き！！」

オレに飛びつくように抱きついた音遠ちゃん。

オレはそんな彼女を優しく受け止め、抱きしめる。

やっと掴んだこの幸せ……命を懸けて守り通してみせる！！

手放すくらいなら掴むな。一度掴んだら、命の限り守り通せ！

それが……それがオレのポリシー。曲げないよ。絶対に。

というわけだ。いやはや、今思い出しても甘酸っぱいつーかねえ。

## Chapter 2: 男として……

オレっちの番のようです。待ちくたびれたぜ。

男の中の男のオレっちの語り、聞いてくれれば幸いです。では  
いきまっす！

「マスター、いつもの」

「はいよ」

いつものとは、オレっちとマスターにしかわからない、男の交わ  
した合言葉。

常連のオレっちにとって、こんな事は朝飯前のさらに前の食前酒  
のようなもの。

ハードボイルドに決めて、更なる高みを目指す。

「……マスター、今日の豆は一段と厳選されてるです」

「いや？ いつもと同じ物だけど？」

「がっ……」

「まだまだ真の男とは程遠いねえ、海斗くん？」

「面目ねえです……」

「なあ、一つ聞いていいかな」

「はい？」

「キミはどうして、そう男の中の男にこだわるのかな……ってのが  
気になってな」

「それはです……」

オレっちはマスターに、過去の出来事を話した。オレっちが男の  
中の男を目指すようになったきっかけを。

中坊の頃だった。オレっちは野球少年だった。まあ、今でもそう  
だけ。

毎日のように汗と血にまみれながら、白球を追いかけていた。入部後、そんな時の部長さんが放った言葉にオレっちは触発されたからだ。

「いいかお前ら！ お前らは自分から我が野球部に集ったんだ。いわば、お前らは志願兵だ！」

し、志願兵……？

「その事を忘れずに、これから練習に励んでもらいたい。……俺についてこい！ お前ら！」

シビれた。入っちまった。こんなにもアツイ人がいるなんて思わなかった。この人こそ男だ。

オレっちの、男の中の男を目指す物語はここから始まった。

実力主義。弱者は切り捨て、強い者のみが生き残るというあまりにも過酷な日々の練習。

オレっちももちろん自分なりに頑張った。けどなかなかうまくいかず、先輩たちに怒られるし、いつつも足引っ張ってた。

それでも、辞めようって気は起こらなかった。本当の男というものは、こんな事ではくじけないのだと思ったから。

ある日、部長がオレっちに向けて言ってくれたことがある。オレっちはそれで完全にキチまった。

「原田あ！ 男ってのはなあ、何だと思うよ？」

「男でっすか！ 男……。その、っ、つ、ついでるもんがついでるからでっすか？」

「バツキヤロイ！ そりゃ、男であるための最低条件だろうが！ んなもんがあるうと、ここが決まってなかったらそいつはオスだ。男じゃねえ！」

部長は親指で自分の左胸を指し示す。ここ……すなわち心。ハート。ハートが決まってなかったらただのオス……。そうか！

「お……オレっちが間違ってたでっす！ 本当の男ってえのは、ハートに火のついた奴でっすね？」

「そうだ！ でも、それだけじゃねえ。原田あ！ てめーのハートに光る火は、どんなのだ！？」

「えっ……。そ、それは……」

「返答に困るな！ ただ火いつけてるだけじゃ放火魔じゃねえか！ いいか原田。普通の火だって、燃料が無ければすぐに消えちまうだろ？」

部長はオレっちの肩に手を乗せ、オレっちをまっすぐ見据えて語りかけてくる。

「その都度、燃料となるものを火にくべなきゃなんねえ。心の火を消さねえためには燃料、すなわち確固たる信念を持つってことだ！

わかるだろ？」

「はっ、はい！」

「よーしいいぞ。それさえ持てれば、それこそ燃料は無尽蔵にあるわけだから、いつまでも心の火を消さずにいられるんだ」

そこまで言った時、部長はオレっちの両肩をバシンと叩いた。

「ハートがそうなった時！ 人間火力発電所になった時！ てめーの目指す『男の中の男』という名の刀が！ てめーの心に突き刺さるんだよ……！」

「……！！」

「つまりだ、自分が確固たる信念を持てたら、そいつは本当の男になれるんだ。原田あ！ てめーはそういう確固たる信念、持つてるか！？」

「……っ！ お、オレっちは……！！」

オレっちは慟哭した。完全にオレっちの心に響いたからだ。

「……っーわけです」

「ふむ……。その子、凄くアツい奴だったんだね。今どうしてるの？」

「えっとですすね、大学には行かないで社会人野球やるために就職したらしいですよ」

「そうか。……で、海斗くん」

「はい？」

「キミはその部長さんの言葉を、忘れたわけじゃないだろうね？」  
「何を言うんですか！ 今こうしてマスターに洗いざらい話せるくらい、オレっちの中ではめっちゃ鮮明な記憶としてここに刻まれているんです！」

オレっちはマスターの言葉にムツとしながら反論した……が、マスターはさらに攻めてきた。

「だとしたら、それをちゃんと実践してる？」

「してるじゃないですか！」

「どういう風に？ 具体的に」

「ぐっ……。そ、それは……」

「そら、言えないじゃないか。キミの心に刻まれた言葉は、その程度なのか！？」

「うっ……」

「話にならないね。キミは、言葉と行動が伴ってないよ。見てみる、キミの周りの子たちを。みんなそれぞれ確固たる信念を持っているぞ」

「たっ……。例えば！？」

「まず翔司くんは、自分のやりたい事を見出すために大学の合格を勝ち取った。それは、彼女である音遠ちゃんとの誓いを果たした結果でもある。キミも見ただろう？」

「た……。確かに……。あん時の翔司さんは誰よりも輝いてたです……」

「圭輔くんもそうだ。このカフェに集まった子たちは、みんな彼の周りに集まってるんだよ。その中心にいるってことは並大抵のことじゃないと思うな」

その通りだ。オレっちの場合ねーちゃんの知り合いつてことである人と繋がっている。

「さらに、みんなの相談役でもある。自分の抱えている事があるに



も関わらずね」

「そうでっすね……。音遠さんがいなくなっただって時に真っ先にオレっちたちを集めたのもあの人だった……」

「灯輝くんは……昔ワルだったみたいだけど、そこから足を洗って夢に向かって進んでいるよ」

「……」

「他にもいろいろ知ってるけど……共通する事は、みんな『自分』というものを持っていた。でもキミはどうだ、何かそういったものはあるのかい？」

「……！」

言えなかった。何も反論できなかった。言葉がなんも、出てこなかった。

オレっちは男の中の男どころか、男でもなかったかのように言われて、心がズタズタに切り裂かれたように思えた。

それでもなんとか搾り出した言葉は、笑っちまうくらいすげー弱々しかった。

「い……今……模索中でっ……す。中途ハンパは……ダメでっすから……」

「ま、焦ることは無い。ゆっくり見つけていけばいい。僕みたいに老い先短い人間じゃないんだし、キミの未来は無限に広がる大宇宙だ！ だから大丈夫だ、未来の男の中の男くん」

「ま……マスター……！ オレっち……オレっち……！ ……いや、本当の男は涙は見せちゃダメ……でっす！」

「うむ、その通りだ。しかし暑くなってきたな……なんでだろう」

家に帰ったオレっちは、自分の部屋のベッドに横たわっているいる考えていた。

マスターに言われて気づかされた、オレっち自身の弱さ、甘さ。

そう、まだオレっちは『自分』というものを持っていない。

どうすれば……？ オレっちにしかないものって……なんだろう？

と考えていると、不意にドアを叩く音が。ノックじゃ済まされな  
いくらい強いから、こりゃねーちゃんだな。

「何だよねーちゃん!？」

「入るわよ!？」

オレっちの返事も聞かずに強引に入り込んでくるみさきのねーち  
ゃん。まーた何か言われんのか……？

「……なーにガラにもなく悩んでるのよ。アンタがいくら悩んだっ  
て意味無いのにな」

「うるせーな! ねーちゃんにオレっちの何がわかるってんでっす  
か!? ていうかなんで悩んでるって知ってるんでっすか!？」

「あーら、アタシにそんな反抗的な態度取っていいのかしらねー？」

「……くっ!」

「……ねえ、そんなにアタシが怖い? ……だからアンタは自分っ  
てのを持ってないって言われんのかな!」

「えっ……何でそれを!？」

「マスターよ、マスター。アンタ、マスターにボロクソに言われた  
んだってねー」

「うっ……。そう……。でっすよ……」

「で、アンタはどうしたいの?」

「オレっちはっ! ……自分っつーもんをしっかりと持って、男の中  
の男を指すって……」

「そ・の・た・め・に!! どれしたいのかったの! アンタが男  
の中の男を指すのは勝手だけどね、身内にそんな風に悩んでん  
のがあると、こっちだって気が気じゃないのよ!」

「んな事言っただって、こーゆー問題はサッサと解決するってもんじ  
ゃ……」

「バカチン!! どれしてわかんないの!? アンタはっ! もう  
自分っつてものを持つてんじゃないの!」

「……一体なんですすか。参考までに聞かせてもらおうじゃねーか」  
「アンタがっ! アンタでいること自体よ! アンタの名前は何、

言ってみなさい！」

「オレっちは……原田海斗だ……！」

「そうでしょ！？ それはもう変わらないこと！ アタシ、原田みさきのたった一人の弟！ それがアンタ！ 他に誰かいるとでもいうの！？」

「……いねーよ」

「でしょ！？ じゃーそれがアンタじゃない！ アンタしかいないじゃない……！」

「ねーちゃんの弟だ……って事が、オレっちがオレっちである証拠……」

「そう！ アンタは、アタシのたった一人の弟。他の誰でもない！ アタシも、アンタっていう弟がいるからこそその原田みさきのよ！ ねえ、アタシの言ってることなんか間違ってる！？」

「……？ 今日のねーちゃんは何かおかしい。こんな感情的になるなんて……と思った途端に、ねーちゃんは泣き始めた。涙がねーちゃんの頬を伝う。

「ぐすっ……。アタシは……アタシはっ……！」

「ねーちゃん……」

そんなねーちゃんを見てらんなくなったオレっちは、震える肩に恐る恐る手を置いた。

「な、何よ……？」

「サンキューです……マジで。オレっちになんとか自分ってえのを持たせたいからそう言ってるんだろ？」

「……礼なんか言われたって嬉しくないわよっ」

「何をそんなに強がってんでっすか。……オレっちはねーちゃんのことたった一人の弟なんだろ？ だったらたまにはお姉さん孝行させるって話です」

「海斗……。アタシは……！ ぐすっ、アンタがバカにされたのが……悔しいの！ 悔しくて仕方ないの……！」

バカにされた……ってのは、今日オレっちがマスターに言われた



……げえっ！ 後ろから強力な殺気が！！

「海斗く〜ん、よくもアタシの話をしてくれたわね〜。……覚悟し

やがれば海斗！」

「なああああ〜〜〜！！！！」

### Chapter 3 : 好敵手

俺か。なにか話せって言われてもなあ、よくわからないよ。  
んじゃーま、俺のたわごとでよけりゃ語ろうか。

こないだ俺は、以前根城にしていた裏通りに立ち寄ってみた。  
昔はここで幅を利かせてたもんだけど、足を洗った今じゃすっかりご無沙汰しちまったな。

いろいろあつたよな。ここでの経験は、俺にとってすべてプラス  
……になったかどうかはわかんねえけど。

しばらく歩いてると、ここらの雰囲気は全くそぐわない人を見かけた。

「……あれ、優香さん？」

「入沢さん！？ 何故ここに……？」

「いや、たまたま通りかかったから懐かしくなって。そっちは？」

「わ……私は、そう、ここにお金が落ちていないものかと気になりましたので……」

「へえ〜。相変わらずだな。で？ 収穫はあつたのか？」

「……え、ええ。ほら御覧なさい、50円玉ですわ」

「おっ、やったじゃん。そーいや俺も、ここらで結構拾ってたっけか……」

「……あ、あのっ！」

普通に話してたのに、いきなり声を大きくしてきた優香さん。俺は少しだけビビりながら返事した。

「う……うん？」

「このあと……お時間はございますでしょうか？」

「時間？ いや、ヒマだからここに来たわけだから……」

「でしたら……私とお手合わせをしていただけませんか？」

「へ？」

いきなり何だ？ お手合わせ……って？

俺が疑問たつぷりな顔で彼女を見ると、優香さんはやや視線を逸らしつつ答えてくれた。

「俗に言う、ケンカです。私……以前あなたと手合わせをした際、勝負がつかなかったことを記憶しています。それ以来ずっと、再戦を希望していました」

あー、そんなこともあったっけ。確かにその時は決着がついてなかったけど、まさか向こうがその事を覚えていたなんて思わなかったぜ。

「ですから……今こうして出会えたのも、きっとそうしるとの事なのでしよう……。よろしいでしょうか？」

「……つまりだ。ザックリ整理すると、優香さんは俺とケンカしたいと、そういう事だな？」

「ええ、そうですね。やりますの？ やりませんか？」

「おもしれえ、やってやるうじゃないか！ 売られたケンカは買わねえとな！」

「ご安心を。今回は私一人です。どちらかが戦意を喪失するまで続けましょう！」

こうして、あれよあれよのうちに俺と優香さんのガチンコバトルが始まったわけだ。

彼女はいきなり間合いを詰め、俺のどてっ腹に一撃を食らわせた。

俺の知ってる女の子の中でも一番の細身だと思われる身体からは、およそ想像もつかない強力な拳。

そうだ、彼女は蹴りでコンクリぶっ壊したって自負してたな……。にしても、強え！

「どうなさったの？ まさかこれではありませんよね？」

「へへ……。たりめーよ。……お返しだ！ うらっ！」

「……………！ がはっ……………！」

俺も反撃に転じ、手刀で彼女の右腕を強打した。

自分でも分かる、クリーンヒットだと。何故なら、俺も痛かったからだ。

「くっ……………。やりますわね……………」

「へへ、そつちもな！ また腕を上げたかあ？」

「もちろんですわ。毎日の鍛錬を欠かしていませんし」

「だからか……………。だよなあ、毎日やってねえと、その細身を保ち続けられないよな」

「……………な、ななっ！？ 何を言い出すのです！ でやあああー！！」

「やべえ！ ……………ぐおあっ！！」

マズった。これは痛え。彼女の真っ直ぐな蹴りが俺の胸部を直撃した。

あまりにも強かったため、俺は吹っ飛ばされた。たまらず優香さんも駆け寄ってくる。

「いけない！ 大丈夫ですか！？」

「こ……………こんなの……………ちつとも痛くねえさ……………。へへ……………」

ウソだ。すっげえ痛え。だけど、女の子の前でそんな姿見せられねえ。

俺は痛む体に鞭打って立ち上がり、ファイティングポーズを取り直す。

「ふふっ……………。10カウントに救われましたわね」

「まあな。仕切り直しとしようぜ」

そこからは一進一退の攻防となった。もっともこちらは女性を相手にしてるからあまり手荒な事はできない。拳じゃ殴れないし、顔に傷つけるわけにもいかない。

なので手を使うときは手刀で腕だけを狙うようにしていた。しかし彼女は容赦ない。本気で向かってくる。

だけど……………こっちが手荒な事できないって事を差し引いても、強



えよマジで！ 勝てねーよ！

「たああああ！」

「甘いつー！」

俺は彼女のパンチを受け止めた。そして手の動きを封じようとしたが……その直後に脇腹に強烈な蹴りを食らわされた。

思わずうずくまった俺に、彼女は畳み掛けるように攻める。この時も、俺のこの体勢を待ってましたとばかりに後ろ回し蹴りを放ってきた。

こんな状況じゃ、避けるどころか受け止める事もできやしない。なすすべもなく食らい、くずおれた。

「はあ……はあ……はあ……。や、やりましたか……？」

だが、倒れたのも計算のうちだ。俺はその体勢のまま脚を大きく回し、足払いをかける。

「うっ！？」

バランスを崩した優香さんはしりもちを付く……前に受け身を取って転倒を免れた。だが、そのわずかな時間でも俺が立ち上がるのには充分だ。

立ち上がった俺に対し、立てひざの優香さん。俺のひざの位置に彼女の顔があった。

立ち上がるうとした彼女のこめかみに、俺はひざ蹴りを放った。

……本気で。

つて、本気で？ ……やべえ！ クリーンヒットさせちまった！

「うっ……ぐ……」

「おいっ！？ 大丈夫か！？」

「……大丈夫に決まっています！ てやあああー！！」

「ぬっー！！」

彼女もタフだ。あの蹴りを受けても平気な顔をしてやがる。

なおも立ち上がり、俺にかかと落としを決めようと脚を大きく上げてきた。

こりゃダメだ、避けられねえ……と思った俺は諦めて防御の姿勢

を取った。

……しかし彼女はその脚をゆっくりと下ろすと、小さく息を吐きながら言った。

「安心なさい。これは決めません。……あなた、腕が落ちたのではありませんせんか？」

「……ちっ、そうかも知れねえ。ケンカとか最近してなかったしなあ……」

「そうでしたの……。どうします？ 続けますか？」

「……いや、いや。このままやっても勝てそうにないしな」

「ふふ……。ということは、リベンジ成功ということでしょうか」

「なんだ？ もしかして、俺とケンカするためにここに来てたのかやっぱ」

体についた砂を払いながら言うと、優香さんは珍しく顔を赤くしながら反論する。

「ちっ……違います！！ ですからっ、この辺りにお金が落ちているのではないかと思っただからっ……！」

「ははっ、そーゆーことにしとくよ」

「そうなのです！ ……では、どうぞ」

「ん？」

優香さんは、やや傷ついた手を差し出してきた。

「握手ですわ。戦い終わった後はこうするものでしょう？」

「そ、そうだな」

俺は彼女の手を握る。すると彼女はその手を強く握り返してきた。

それこそ痛いくらいに。

「……？」

少し気になったが多くは語らず、俺は手を離す。

「これからどうしますの？」

「これから……。別に何もすることないから、カフェで誰かとだべろっかな……」

「でしたら、私も一緒にしますわ」

俺のその言葉を待っていたかのように食いついてきた優香さんだった。

ちようど単車で来てたので、彼女をそれに乗せてやるうとしたけど……。

「……これに乗るのですか？」

「ああ」

「安全性は問題ありませんね？」

「ちゃんとかまってるじゃ、な」

「つ、つかまる！？ どこに!？」

「いや、俺とか……そのベルトとか」

「……。あら、わりかし丈夫ですね。いいでしょう、これで行きましょう」

「へいつ、お嬢！」

何故か気分がよくなった俺は、ちつとばかしふざけてみた。

「あなたまでそう呼ぶのですね……。私ほど呼び名の多い女も珍しいわよね……」

そんなわがままお嬢様を乗つけて、俺たちはカフェに向けて走り出した。

カフェには相変わらずのマスターと、何人が知り合いもいた。

彼らは、俺と優香さんが2人で来たことに興味津々のようだった。

「おっ？ 珍しい組み合わせだね」

「そうだね。途中で会ったの？」

「ええ、まあ。途中で拾ってきたんです」

「拾ったって……。人をモノ扱いたくないで下さらない？」

「あつ、わりーわりー」

「……ふふつ、冗談ですわ。ほら、座りましょうよ」

俺たちは2人がけの席に向かい合わせに座る。

そんな俺らを見ていたマスターが、なぜか薄ら笑いを浮かべていたような気がしたけど……？



て向かい合わせに座った。

したら高校生たちが来て、瑞奈ちゃんが大声出したかと思ったら泣き出して。

で、泣いた理由がお姉様……つまり、優香さんを取っちゃやだ、と。

だよなあ、俺には非がない気がするんだけど……と思っていたが、現実には非情だった。

数分後に訪れるは、四面楚歌。つまりみんながみんな、俺を責め始めたのだ。

「あーあ、泣かしちゃった。灯輝くん悪い子なんだ」

「灯輝さん！ 女の子を泣かすなんて、男の風上にも置けねえですよ！？ オレっち、あんたをずっと信じてきたのに……最低ヤロー！」

「あたしの親友を泣かした罪は重いわよ。元不良がなんだってーのよ！ 負けないんだから！」

「ちょ、ちよつと待ってよ！ どーして俺が責められなきゃなんねーの！？ なあマスター、何とか言ってよ！」

「何とか」

俺は思わずマスターに助け舟を出した……が、この男は悪魔だった。いいや悪魔と言うのも生ぬるいぜ……！

それにしてもひでえ！ みんなして俺を責めやがって！ 冗談だつてわかっているだけにさらにうぜえええ！！

……その時、泣きじゃくる瑞奈ちゃんの元に優香さんが歩み寄り、肩に手をかけながら言う。

「わかりなさい。私はあなただけのものではないの。スクールでは特別にあなただけについていますが、あそこ以外でもあなたについて回るわけにはいきませんの」

「えぐ……。はい……。くすん……」

「ね？ わかつたらもう泣くのはやめなさい。よしよし……」

瑞奈ちゃんよりだいたい背の高い優香さんが彼女の頭を撫でる。

そんな優香さんを、瑞奈ちゃんは心底嬉しそうな顔で見上げていた。

「……はっ!? わ……私はそ、そんなつもりで言ったのではありませんよ!? スクール以外では特定の相手について回るとか、そのような事ではございません事よ!」

突然意味の分からない反論をした優香さん。何故かほのかに顔も赤いし。

……と、そう思った俺にマスターがのっそりと近づいて来て言う。「灯輝くん。キミはまたずいぶんな朴念仁なんだな」

「はい? どういう事?」

「言葉通りだよ。たまには誰かが向けてくれる目にも気づいてやるうよ、みたいな」

「……?」

家に戻って、クッションを枕にして横になりながらマスターの言葉の意味を考えてみた。

誰かが向けてくれる目? もしや……? ってのはあるんだけど、言葉にするのはなんかアレな気がする。

まだ自分の気持ちは固まってないわけだし、そんな状態で軽々しくあーだこーだとかつてのは俺は嫌いだ。別に焦る事もないわけだし。

たとえば誰かが俺に目を向けてくれたとしても、向こうだってどんだけマジかわからねえし。マジで本気だったなら行動に移すだろうから。

……一時期ワルやってた俺にとって、一年二年の遅れなんてどうでもいい。

だから、そこも俺のペースで進んだっていいんじゃないか?

俺の人生だし、決めんのは結局は俺なわけだ。

もう20歳も過ぎたわけだし、誰かに指図されながら過ごす人生はまっぴらごめんだね。

……おっと、もうこんな時間か。んじゃ、俺からはここまですって  
しよっ。

## Chapter 4：私の表と裏

はい、私の番ですね。なるべく早く喋るつもりですけど、  
どうなるかわからない……。  
では始めます。

私がみんなと会ったのは3年生の時の秋、後期の授業が始まってからでした。

みんなと言っても、まずはみさきちゃんだけだったけど。

この単位を取れば、この系列での卒業に必要な単位になる選択の授業。

でも……この先生がすぐにスライド変えちゃうから、全然書けなかった……。

あ……って言ってももう遅くて、結局なんにも書けなかった……。  
うなだれながら教室を出ると、ポニーテールを揺らしながら一人の女の子が声をかけてきた。

「あの、さつきアタシの近くに座ってましたよね？」

「あ……はい」

「もしよければ、アタシのノート見ますか？ あの先生、すぐスライド変えちゃってたけど、アタシ一応書けたから……」

「え？ いいんですか？」

「いいも何も、近くの席で半ベソやらかしてるのを見過ぐすなんてアタシの性に合いませんからね」

「え？ 私、泣いちゃってたの……？」

「あちゃ、ごめんなさい。気になったから見ちゃってました。あ、これノートです」

「ありがとうございます。ちょうどこの後お昼だから、学食で書きます」



「あ、もしよければ一緒に来ます？ 友達も何人が来ると思っていますから」

「いいんですか？」

「もちろん！ 友達が多いほうがいいじゃん！」

私はその子に従って、学食に向かう。

彼女の向かった席には、すでに2人ほど座っていた。

「みさきちゃん！ こっちこっちー！」

「あいよー！ 今行く！」

「あれ、その子だね？ お友達？」

「うん。えっと……名前は？」

「私は、青山絵実梨っていいいます。経済学部の3年生です」

「えっっ！？ さ、3年生！？ どどどどーしよ、アタシらの先輩

じゃんー！」

「あわわ……。ボクさっき『その子』なんて言っちゃったよ……。てつきり同い年かと思ってたのに……」

「えっ？ みんな何年生なの？」

「みんな1年生です。あわわ……。さっきはゴメンナサイ……」

先にここに座っていた方の女の子が、私に申し訳なさそうに頭を下げた。

「いいよ、謝らなくても。それに、私そんな上下関係とか気にしないから、ふつうのお友達みたいに呼んでいいよ」

「えと……じゃあ、絵実梨ちゃんでいいの？」

「いいよー！ 私のみさきちゃんって呼ぶから」

「やったねっ！ みさきちゃん！ ……あっ、ボクは上原芽衣っていいいます。よろしくね！」

「芽衣ちゃんね。よろしく……。そっちの男の子は？」

「ほーら、周一！ あいさつしなよー！」

「……んああ？ あー、よろしく。……ぐう」

「……っ！ 違うでしょー！」

「だああ！ うっせーな！ わーった、わーったよ！ 聞こえてるってえの……。えっと、俺は手塚周一っていいいます。シユウとでも呼んでやって下さい。よろしく」

「よろしくね。いいな。みさきちゃんは。お友達がいっぱいいて」

「えーそう？ 絵実梨ちゃんばわくんってしてるから、友達とか多いと思うんだけどーなの？」

「あつ、ボクもそう思った！ なんか……一緒にいると和むみたいなの、ね？」

「そうだな。だから眠くなるんだな、うん。っーわけで寝るわ」

「こらーっー！」

「きゃははっ！ 芽衣ちゃんとシユウくんは、もしかして付き合ってるとか？」

「そーそー！ もーね、らぶらぶなのよねー！ ねー！？」

「むにい……。みさきちゃんがいぢめる……」

この後、いろいろお話しながらご飯食べたたり、さっきのノートを写させてもらったりもした。

携帯のアドレスも交換して、また明日以降も会えるようにした。

次の授業はゼミ。前期からの持ち上がりで、先生もまわりのみんなもおんなじ。

私たちのグループは後期でいきなり発表だから、今週は調べだけとなっていた。

とりあえず図書館に集合する事になってたけど……話とかしてたら遅れちゃった……。……。

「おつかれ。もーエミリー、遅いよ」

「うっ、ごめんね」

あ、ゼミの友達にはエミリーって呼ばれてる私です。

その友達が、いきなり私に尋ねてきた。

「ね、今夜のこと聞いた？」

「な〜に〜?」

「なんかね、先生と飲みに行くんだって！ お金は、先生が全部出してくれるらしいよ」

「わあ〜、おごりだ〜」

「エミリーも行くよね?」

「行く〜!」

「このみんなで行くのって初めてだから楽しみだね！ 飲みの席って、その人となりが一番出てくるじゃない」

「うんうん〜」

「今日の飲みの席でもっとみんなのこと分かり合って、これからの話し合いとかがスムーズに進むんだったら、それにお金は惜しまないってさ、先生」

「私たちの事を考えてやってくれてるんだね〜。すごいね〜」

「期待せずして持ち上がった、飲み会の誘い。お酒なんていつ以来かな〜?」

でも、いつも私ってお酒飲んだ後の記憶がなくなってるんだよね

……。

いつもほどほどにしないと〜って思ってるのになかなか出来ない〜。自分一人の時だったら何とかなるけど〜……。

結局この時も〜……。

学校が終わって、7時くらいから2時間ほどの飲み会が始まった。40歳くらいの先生と女の子4人っていう組み合わせに、先生もなんだか嬉しそう〜。

「はっはっは、なんだか悪い気がするなあ」

「そんな事ないよー先生！ おごってもらってるんだもんね!」

「まあ、おごりとは言え飲みすぎてはいけないよ。明日に響くし、私の財布にも響く」

「きゃはははっ！ おもしろ〜い!」

私もそこでつられて笑う。……とその時、ファーストドリンクと

して頼んでいた中学生のジヨツキが人数分来た。

みんながそれをちよつとだけ持ち上げると、先生が乾杯の音頭を取った。

「それでは、このグループの発表が素晴らしいものになる事を願いつつ、乾杯！」

カキイーン！

ジヨツキのぶつかる音が気持ちいい。一人の子が一気に半分を飲み干したらみんなから拍手されてる。

それじゃあ、私もちよつとだけ。

……こくん。うっ、苦いっ。なんか食べなきゃ……。

「エミリー、飲んでる？」

「わっ、もう酔ったの？」

「かもね」

「いや、そこさわらないで」

「なに言ってるのよ。エミリーのちっちゃいから触って大きくしてあげてんの！」

「やっ！」

うっ、酔ったみんなにいろいろな所触られちゃってちよつとドキドキしちゃった……。

その中でも私は少しずつ飲んでいく。

ここから先は記憶があいまいですけど……こんな感じだったと思います……。

「やめてよっ！」

「やめなっ！ もっと飲めっ！」

「やめてったらっ！」

「あー！ 私にもエミリーいじらせてっ！」

「わっははは、みんなは本当に仲がいいんだな。こりゃ発表が楽しみですよ」

「……やめろ」

「へ？」

「やめろつつつてんだよボケ。それとも、大声出さなきゃわかんねえかあ！？」

「エミリー？ どしたの？」

「どしたの、じゃねーよ！！ さつきからじつとしてりやあよ、てめえら好き勝手してくれんじゃねえかよ！！ ああ！？ 聞いてんのか、よっ！！」

私はカラになったジョツキで、軽く近くの子の頭を叩いた。あくまでも私は軽く叩いたつもり……本当だもん……。

「い……いったあゝい！ エミリー！ なにすんのよ！」

「なにすんのよじゃねえだろ！！ さつきからてめえら、私の体にベタベタ触りやがって！ やめろつつつてんのにやめねえとか、どついう了見だ！？ ああ！？ 答えるやボケが！！」

「ご……ごめんねエミリー。そんなにイヤだとは思わなくて……」

「ごめんで済んだらマツポなんざいらねえんだよ！！ こいつあポリ公使うことじゃねえにしるよお、だからって好き勝手していいって理由にはなんねーだろーが！！」

私の変わりように、みんな黙っちゃった。そうだよね……あのんびり屋がこんなになっちゃうんだもんね……。

「……なあ、私の言ってる事間違ってるか！？ よお、おっさん！！」

「お、おっさん！？ ちょっとエミリー！ 先生になんてこと言うの！！」

「はあ？ 女の子4人を飲みを誘おうなんざ、ぜってえどつかに下心があんだよ！ ちげえのか！？ あわよくば、酔った勢いで私の体に触るとかしてたんじゃねえのか！？」

「それは違つぞ、青山さん。私を信じてくれ」

「けっ、どーだか。だったらよお、私がさつきイヤがってたのをなんで止めなかつたんだよ！！」

「友達同士のスキンシップなら、少しくらいは良いだろうと思った

からだ」

「はあ！？ こんなグループ、友達でもなんでもねえよ！」

ああもう、私ったら何言ってるの……。

「ただ発表を済ませて単位ぶん取ってバイバイってなだけの集まりだろうが！ どーせ発表終わったらそれ以降繋がりにくくなっちゃうんだよ……！」

「そこから新たな友情を形成してゆくものだろう？ 違うか？」

「そうよ！ 私たち、いつもおとなしいエミリーとも仲良くなりたかったの！ 本当よ！」

「はっ、じゃーこれでご破算だな。私の酒の席でのこの姿見ちまったら、二度とそんな気起こらねえだろうよ！」

「エミリー……！」

「酒が足んねえよ！！ もっと持ってこいや！ つーかてめーのよこせ！ さっきのー気から全然減ってねえじゃねえかよ！ もっといねえ」

強引にジョッキを奪うと、それを一気に飲み干した私。

それを力いっぱいテーブルに叩きつけると、周りのお客さんも反応し始めた。

「おーいねーちゃん！！ 大生3つ！！」

「ちよつとエミリー！ もう飲んじゃダメ！」

「るっせえなあ！！ 私の勝手だろうが！！ そのおっさんがバカみてえに出してくれるってんだからよお、飲まなきゃ損じゃねえか！ うおおおお！！ 飲むぜ！！！」

結局私はそれから一人で注文を重ね、先生にいっぱいお金を使わせちゃったみたいです……。

翌日……すっかりお酒の抜けた私は、いつもの調子で教室に入っ  
た。あ、別の授業ですよ。

「おはよ〜！ ……あれ〜？」

教室に入って挨拶したら、みんなが私を避けるように離れていっ

た。

「ね、どうしたの？」

「……エミリーさ、あんた昨日大暴れしたんだって？」

「え？ 昨日はゼミのみんなと飲みに行っただけだよ？ よく覚えてないけど」

「あんたねえ……あんなに大暴れしたのだけ覚えてないの？ 昨日飲みに行ったの、私の友達でもあるんだけど、もう二度とエミリーと飲みたくないって。ホントに覚えてないの？」

「う、わかんないよ。ただ、みんなにいるんなとこ触られたのはわかるんだけど……」

「先生も泣いてたよ、一気にお金なくなっちゃって」

「あわわ……。ね、謝った方がいいのかな……？」

「そりゃね。出来るだけ早いうちにね」

「うん……」

授業が終わってから、私はいろんな所に謝りに回った。みんな怒ってたけど本気で謝ったら何とか許してくれた……。……。

その代わり、もう二度と飲みに誘われないって言われたけど……。……いいもん、お酒飲みたくなったら一人で飲むもん。

その事をみさきちゃん達にも話してみた。

「えー？ 意外だね。そんななの？」

「そうみたいだけど、わかんないの」

「でも、ボクたちまだ20になってないから飲みには行けないね。

そんなになっちゃうんじゃないかとどっちにしろ飲みには行けないけど」

「何いい子ぶってんだよ芽衣。お前んちの冷蔵庫、見慣れないのばつか入ってんじゃないか。ありや酒だろ？ 毎晩飲んでるんだろ？」

「むに、あれおいしんだもん……。それに、アルコールあんまり入ってないから……」

「けっ、この不良娘が。俺は酒もタバコもやるとしたら、本当に20歳になってからだな。俺なりのけじめってやつだ。安っぽいけどな」

「えらいね、シユウくんは。でも、20歳になったからってあんまりやりすぎちゃダメだぞ？」

「絵実梨さんには言われたくないなあ。俺の周りでも、飲んで大暴れしたとかってちょっとした人気者だよ？」

「うう、シユウくんがいぢめる……………」

「まーとにかく、そんなに酒グセ悪いんなら絵実梨ちゃんはお酒飲む時は一人で飲むこと！ ね？」

「はい……………」

と、いうわけで。私はお酒はそれ以来一人で飲むようにしています。それに、実はそんなにお酒強くないから……………。でもよくあの時あんなに飲めたよね……………。



## Chapter 5 : かけがえのない、ともだち

さてと、あたしは何を話そうかな？ 月並みだけど、学校でのあたしでいつか。じゃいつくよー！

あたしのクラスは、ある意味で個性の強い人ばかりが揃ってる。特に担任の先生が！

中学の先生から高校の先生になったっていう、ちょっと珍しい人。けどまだ若いんだ。カフェのマスターと同じくらいかな？

身長もマスターほどじゃないけどかなり高いし、女の子の人気は絶大。あ……あたしは、ちょっとは好きよ？ そう、あくまでもちよつとだけはね。

その先生の名前は、須藤孝太郎。でも普通に呼ぶと長いから、みんなコタロー先生って呼んでたりする。え、あまり変わってないって？ 気にしない気にしない。

部活はテニスだつてさ。ちょっと意外……。あーあとは、活動してんのかどーだかわかんないような化学部の顧問でもあるみたいだけど、メインはテニスなんだつて。

だからね、あたしは瑞奈にテニス部に入りなつていつつも言ってるんだけど、あの子つたら頑として入らないの一点張りなのよね。

「ねー瑞奈あ、なんで学校のテニス部には入んないの？」

「いいの！ わたしには優香お姉様のいるスクールがあるんだから」

「はあ、またそれなの？」

「かおりちゃん、あまり無理にすすめるのはいけないです」

「んーでも、なんだかちよつちアブねー関係になりそうです」

「海斗は黙ってる！」

「……はいです」

「先生よりも優香さんの方がいいの？」

「もちろん！」

「あのさ、優香さんのどこがいいの？ 確かにあの人キレイだけどさ、だからなんか近寄りづらいのよね。なーんか『私に近づくと刺すわよ』みたいなオーラ出してない？」

「かおりちゃんは、ゆうかのおねーちゃんのことकिらいなのですか？」

「いや、そーじゃなくって……なんだろ、あたしにないものばかり持つてるから嫉妬してんのかもね」

「あのね、かおりゆんはお姉様の表面しか見てないからそうとしか言えないの。お姉様はね……」

「あーはいはい、わかってるわよ。猫ちゃんを助けてくれたから、そんな優しい人がやな人なわけないって事っしょ？」

「そうだよ。……あ、先生」

あたしらが下校時間になっても帰らないで話していると、白衣姿のコタロー先生がそこにいた。

着ている白衣にはしっかりとアイロンがかかっていて、ピシッとしていた。

独身のはずなのにその辺の気配りがしっかりしてるのも、人気の秘訣なのかな？

「おっと、すみません。いやしかし、ずいぶんキミらは仲がいいんだね。いいことだ、うん」

「ちょーどよかった！ ねーねーコタロー先生！ 先生からもこの子にテニス部入るように言ってよ〜」

「ぼくから？ うーむ……。ただね、本人がイヤがってるのを強制させるのはよくないな。それに、ぼくは女テニには関わってないし」

「だけどお〜」

「いいの！ わたしには優香お姉様がいるんだから！」

「うん？ 優香お姉様？ ……橋本さん、その人の名字教えてくれるかな？」

「名字……ですか？ 南野、っていうんですけど……」

「南野……優香……。あ、ぼくの中学時代の教え子じゃないか」

「えええええええっ!?!」

「懐かしいなー。あの子に教わってるってことは、まだどこかでテニスやってるのかな？」

「はいっ、そうですっ! あのとあのおつ、優香お姉様はスクールでわたしの専属コーチをしてくださってるんです!」

「……はっはっは! そうかそうだったのか! 嬉しいなあ。ぼく  
の意思を受け継いだ子が、また新たな子にそれを伝えていく。……  
これこそ、ぼくの望んでいた教育の理想形だ!」

両手を広げながら、やや芝居がかった口調で喜びを語る先生。こ  
こに、先生の個性の強さを垣間見る事ができるってわけ。

……なんか瑞奈も、目をキラキラさせながら見てるし……。

「はあ……。ねー、海斗にクリス」

「ほわっつ?」

「何でっすか?」

「あたしら、なんなんだろうね?」

「えとえと……。ミーたちは先生の生徒です!」

「いや、そーじゃないと思うでっすけど……」

「はあ、あんたらに聞いたあたしがバカだったわ。ごめんね」

「がっ……。結論出すの早っ! オレっちまだ答えてねーのに……」

「ねえ橋本さん? もしよければ、ぼくもそのスクールに連れてっ  
てくれないかな?」

「あ、いいですよ! 今日もこのあと行くんですよ。一緒に行きま  
す?」

「うん、そうしようか。それじゃ校門のところまで待ってるよ」

「は〜い! ……あ、仕事は大丈夫なんですか?」

「ああ、その辺は心配しないで。明日は休みだし」

「ねえさ、あたしも行きたい!」

「かおりゆんはダメ! カフェでみんなと待っててよ。終わったら

行くから」

「意地悪なんだから全く！ わかったわよ。ほら海斗、クリス。行くわよ！」

「どおうわっ!? ちょ、ちよっと！ 袖が伸びる！」

「へるぷなのです〜！」

あたしは海斗とクリスを引つ張り、Hexagramに向かう。

「いらっしやい」

「あたしスパークリングレモン！ 二人は何にする？」

「えとえと……。ミーはカフェオレがいいです」

「オレっちはいつもので」

「じゃー決定！ そこ座るわよ！」

あたしはいつものように、さっさと注文を済ませて速攻で席に座る。

さすがのマスターも、あたしの速さにはついてこれてないみたい。へへーん、あたしの勝ちー、みたいな？

その勢いのまま、あたしはマスターを呼びつける。……なんかすっげーやな客じゃね、あたし。

「ねーマスター！」

「はいはい、何ですか？」

エプロンで手を拭きながらマスターがやってくる。あたしは前から気になってた事を聞いてみた。

「ここってマスターが一人で動かしてるんだよね？ 大丈夫なの？」

「まあね。キミらが大騒ぎさえしなけりゃ」

「むうう！ 何よそれ！」

「聞き捨てならねえです！ 神妙にお縄につきやがれです！」

「オレっちたちが一体いつ大騒ぎしたっつーんでっすか!？」

「今」

「えっ!？」

「もういいかな？ 行っても。キミらの注文したのはもう出来てる

んだけど、ここにいたら持つてこれないからさ」

「……ん？ あたしがマスター呼んだの注文した直後だよ。でももう出来てるって……？」

「いや、深く考えるのはよそう……」。

「ほらー、こーゆー時一人じゃどーにもできないっしょ？ だーかーらー、そろそろバイトとか考えた方がよくない？」

「……考えとく」

「えっ!？」

マスターから出た言葉は、正直意外だった。

「……あたしが何でこうしたかって言うかね、実はあたし、ここでバイトしたかったんだ。」

もしかして……今ならいけるかも!？」

あたしは注文した飲み物を取りに行ったマスターに、小さな期待をして声をかけてみた。

「マスター！ だったらさ、あたしを雇う気はない？」

「ない」

「早っ!」

というわけで、あたしのバイトの計画は儚く消え去ったのでした。「まっ、そういう事。そんじゃ注文の品、ここに置いとくね。ごゆっくりどうぞ」

言いながらマスターはさっさと奥に引っ込んでしまった。ちえーっ、残念……。あたしはそのまま、まったりと1時間ほどを過ごした。

6時をちょっと過ぎた頃、ドアが開く音がする。

やって来たのは瑞奈と優香さんと……コタロー先生だ。

「いらっしやい。あれ、その人は誰かな？」

「あ、その人あたしらの担任の先生だよ」

「そうでしたか。これはこれはどうも……って、あれ？」

「いやいや、こちらこそ生徒がいつもお世話に……って、ええ!？」

「コタロー!？」

「ダーマス!？」

「……あ、あれ? も、もしかして二人って知り合い、みたいなの?」  
「いやー、久しぶりだなー! 先生になれたんだね!」

「そっちこそ、こんな立派な店持つちゃってすごいじゃないか!」  
「そうだ、ちなみちゃんは元気?」

「相変わらずだね。かわいい僕の奥さんしてるさ」

「ちえーっ、いいよな〜。……ま、お互い年を取ったもんだよな」  
「そうだな……。ま、でもさ。お互いやりたい事やれてるわけだし、それなりに意味はあつたと思うよ」

あたしらの存在に気づいていないのか、大人たちは昔話で盛り上がってる。

「ねえ! 二人って知り合いなの!？」

「あ、うん。中学、高校と一緒にだったんだ。彼の奥さんとぼくは大学までも一緒だったんだよ」

「コタローはいつもあの子の相談相手になってくれたよね。感謝してるよ」

「だったら、彼女をぼくにしてくればよかったのに!」

「はっははは! 人はモノじゃないから、簡単にあげるとかもらうとか使えないよなあ」

「わーかってるって。言ってみただけ」

「ねえコタロー先生。なんかキャラ違うよねーいつもと。よっぽど嬉しいんだ〜」

「そりゃね。何年ぶりだったけか、ダーマス。結婚式以来?」

「そう……なるかな。悪かったね、それから音沙汰なくて」

「ねーねー! あたしらにも教えてよー! 二人だけで盛り上がってないでさー!」

「大人の話に首を突っ込むものではありませんよ、青山さん。……あ、ぼくにも何かちょうだいよ」

「オツケー。……人数結構いるから、暇つぶしでもいっとく?」

「あー！ それいいかも！」  
「いえーす！ おふこーす！」  
「オレっちまだやった事ないでっすから、ちよつどよかったでっす」  
「……私もいただいでよろしいのでしょうか？」  
「いいんですよ！ お姉様！」  
「みんなそれでいいみたいだ。お願いするよ」  
「あいよ。それじゃちよつと時間かかるから待っててね」  
「マスターはまた奥に引つ込む。『暇つぶし』の注文を受けたから。『暇つぶし』とは、ここの裏メニユーを頼む際のキーワード。その裏メニユーとは『最強パフェ列伝・ヘキサゴンリミックス零』の事を指す。」

これだけの人数なら一つ一つ頼むよりお得だから……ね。

6人となつたあたしらは、近くのテーブルを集めて座る。

「久しぶりだね、優香さん」

「ええ。先生こそ、お元気そうで何よりですわ」

「他のみんなはどうしてるかな？」

「それが……あまりよく分からないのです。申し訳ありません……」

「そつ……か。まあでも、みんなそれぞれ頑張ってるんだろつ。そつだよなあ、あれからもう5年も経つんだからな。みんな変わっていくし、ぼくも年を取るわけだ」

「なーに言ってるの！ 先生まだ若いじゃん！」

「そうです！ こたろつ先生はまだやんぐまんです！」

「おいおい二人とも、三十路目の男をつかまえてそりゃないよ。」

「……つて、なんじゃありゃ!？」

先生はマスターの持ってきたでっかいのにビビってた。そりゃそーよね。

そう、あれこそが『最強パフェ列伝・ヘキサゴンリミックス零』。改良に改良を重ねた結果、やっぱり原点が一番いいって事で『零』つてつけたんだつて。

特徴としては直径25cm、深さ30cmの六角形の容器に込められた季節の果物やアイスクリーム、そして何故か乗っているトリユフの輪切りを一度に大人数で堪能出来るメニュー。

常連にしか注文できない、まさに裏メニューにふさわしいものだ。……なあダーマスよ。キミって奴はよくこういうことを思いつくよね。発想が斬新というか、奇抜というか……」

「常に考えてますから。ま、食べてみて」

先生はそのでっかいの上に乗ってる黒いもの……トリユフに手を伸ばす。それに負けじとあたしもトリユフを取る。

次々に手が伸ばされるパフェ。その堂々たる姿も、次第に小さくなっていく。そして……。

「あゝ、おいしかった」

「いやはや……。キミら本当に甘いのが好きなんだな」

「や、オレっちは別にそーゆーわけじゃ……」

「口の周りにクリームつけながら言っても説得力ないよ、海斗くん」  
「がっ……」

と、そんな感じでカフェの時間は過ぎていった。でも……「タロ  
ー先生とマスターが昔からの知り合いだったなんて……」。

あ……。あたしにもいたっけ。幼なじみのみやびよんが……。

本名、神崎都ちゃん。男の子みたいで、ケンカも強かったからいつも守ってもらってた。

家も近くて、幼稚園の頃はずーっと一緒だったんだけどねえ……  
小学校に上がる直前にどっか行っちゃってから全然会わないってか  
噂すら聞かないのよね……。

ずっとみやびよん、かおりゆんって呼び合ってた、あたしの大切な幼なじみ。

先生とマスターの姿見てたら、不意に思い出しちゃった……。

あたしはおねーちゃんにちよつと聞いてみた。

「ねーおねーちゃん！ みやびよん、覚えてる？」



「ん〜……。あ、都ちゃんね〜？ 懐かしい〜。でも、どうしたの〜？」

「あのね、今日うちの先生がカフェに来たのね。それで、なんか先生がマスターの中学時代からの知り合いだったんだってさ」

「わあ〜、すごい偶然だね〜」

「うん。でね？ 二人が楽しそうに昔話してたのを見てたら、不意に思い出しちゃったんだ。みやびよんの事を」

「そうなんだ〜。う〜ん……。連絡先とかわかんない……。よね〜？」

「わかってたらしてるって。どこ行っちゃったんだらう……。〜」

「手がかりでもあればね〜」

「……はあ、ごめんね」

あたしはおねーちゃんの部屋を出て、ため息をついた。

はあ〜……。みやびよん……。あたしの事、覚えてるかなあ？

今、何してるのかなあ？

あの子乱暴者だったけど、少しはおとなしくなったのかな……。？

……。これもまた、会いたい人に会えない辛さ……。〜っていうのかな。

あたしなんかよりもっとツライ思いしてる人だっているのはわかっている。

でも……。！ やっぱり思い出しちゃったら、会いたって気持ち  
が昂ぶってきちゃった……。！

その夜、あたしは久々に声を出して泣いた。

人のために泣いたのなんて初めてだった。

みやびよんに会いたい……。会いたい……。！

会って、みんなと一緒に遊びたい……。！ うぐっ……。！

……。はい！ あたしに涙なんか似合わないっ！ もう泣き止んだよっ！

えっとじゃあ、あたしはこれでおしまいね。

## Chapter 6：私のお姉様

はい、わたしですね。

この場を借りて、ちょっとだけお話しします。

その出会いは、突然でした。

いつもみたいにみんなと一緒に帰り、途中でバイバイする。

帰ってからのわたしの楽しみは、家の近くにあるペット屋さんに行つて猫ちゃんたちと遊ぶ事。

お母さんがアレルギー持つてるから、うちじゃ飼えない。だからこうして遊びに来ているの。

お店のお姉さんもそこは理解してくれているから、わたしが来たら歓迎してくれるくらい。

もちろん、それだけじゃ悪いから、時間のある時とかはお店のお手伝いもした。

その間も、大好きな猫ちゃんたちの顔が見れるから、わたしは全然苦じゃなかった。

でも、その日はペット屋さんに行かなかった。

何故なら……帰り道で運命的な出会いをしたから。

帰り道、わたしは橋をひとつ渡るんだけど、そこを通つた時に猫ちゃんの鳴き声が聞こえた気がした。助けを求めているみたい！

どこかかつて思つて、わたしは川の方を見た。すると……段ボール箱の中に猫ちゃんが！ 大変、このままじゃ流されちゃう！

……でもわたし、今制服だし、泳げないし……。どうしよう……。その時にかげられた声は、とても力強かったことを今でも覚えています。

「どつなさつたの？」

そんなわたしに声をかけてくれたのは、背の高い細身の女性……  
優香お姉様だった。

わたしはゆっくりと川の方を指差した。

「……これはいけません。早く助けなくては流されてしまいます！」

「でも……無理ですよ。わたし、泳げませんから……」

「でしたら、私が行きましょう。あなたはここで見ていなさい」

「は……はい……」

言われるがまま待っていると、お姉様は荷物を全部置き、川べり  
へと走っていった。

そして手近な木の枝を拾うと、精一杯体を伸ばしつつ箱に引っ掛  
けようとしていた。

でも……あと1歩のところまで届かない……。

そうこうしているうちに、お姉様は川に転落してしまった。

「きゃあっ！」

上から様子を見ていたわたしは思わず悲鳴を上げちゃった。

……だけとお姉様は、川に落ちたら落ちたで、なんとその箱に向  
けて泳ぎ始めていたの！

そして、自分の手にその箱を掴むと、川岸に向けて再び泳ぎ始め  
た。

「すごい……」

箱の中の猫ちゃんは、自分の身に起こった危険に気づく事もなく、  
すやすやと寝息をたてていた。

なあんだ……、訴えかけるような声はただの寝息だったんだ……。

「ふう……呑気なものですわね。服のクリーニング代、かかってし  
まいますわ」

全身をずぶ濡れにしたお姉様は、わたしの方を向いてこう言う。

「はい、どうぞ。もう大丈夫ですからね。……では私は仕事があり  
ますので、失礼いたします。ごきげんよう」

その時……わたしの中で何かが起こった。

よくわからないけど……このままお姉様と別れちゃいけないよう

な気がした。

だからわたしは呼び止めた。

「ま……待ってください！」

「はい、何でしょう？」

「あのっ……、どうも、ありがとうございます！」

「あーっ……お礼じゃなくってえ……。」

「お礼などよろしくてよ。私がそうしたかっただけですので」

「もっと聞きたいこと……。そうだ、お仕事のこと聞こう！」

「えっと、そのっ……、お、お仕事って、なんですか？」

「……でもよく考えたら、お仕事のこと聞いて何になるんだろうって思った。」

「だけどそれが功を奏したみたい……。」

「ただのテニスのインストラクターです。それがどうかしましたか？」

「えっと……もしよければ、わたしも一緒に行ってもいいですか？」

「えっ……？ あなたもですか？」

「はっ、はい！ あ……、わたしの名前は橋本瑞奈といいます！」

「あのっ……、もしよければあなたの名前も教えて下さい！」

「きゃああ、名乗っちゃった！それに、お姉様の名前まで聞いてちゃった〜！」

「私の名前……ですか？ 南野優香ですが……。」

「優香さん……ですか。素敵なお名前ですね！」

「ありがとうございます。……あなたの方こそ、とても素敵なお名前ですよ」

「……！？ お姉様が……わたしの名前を褒めてくれた……！ 嬉し〜！！」

「わっ……、そんなこと……ないですよ。……あー、待ってください」

「さいよー優香お姉様ー！」

「お……お姉様？」

戸惑うお姉様と並んで歩く。

水も滴るいい女……。はあ……。うっとり……。

わたしとお姉様は、ほどなくしてテニススクールに到着した。

「うわぁ〜おつきい〜！ お姉様はここで教えてるんですか？」

「ええ……。あの、本当にやるのですか？」

「はい！ もちろんです！」

「わかりましたわ。では、上の者と話をして参ります」

そう言うとお姉様は、まだ濡れている髪を煌かせながらその場を後にする。はあ……。うっとり……。

……。数分後、お姉様はテニスウェアに着替えて戻ってきた。はあ……。この姿も美しいです……。

「待たせましたね。シャワーを浴びていたら遅くなってしまいました。では、こちらが入会に必要な書類です」

お姉様の手渡しす封筒を受け取り、カバンにしまう。

「正式に入るためにはいろいろな手続きが必要ですので、ご両親とこちらの書類をよくお読みの上で再度お持ちになって下さいね」

「は〜い！ あのえっと、見学だけでもしてっていいですか？」

「ええ、いいですよ」

「わーい！ お姉様〜！」

思わずお姉様の腕にしがみ付いてしまった。お姉様も慣れてきたのか、それ以上は何も言わなかった。

「ただいま〜」

「あら、遅かったのね。何してたの？」

「お母さん……。わたし、テニスやりたい！」

「……。え？」

「ほら、今日書類もらってきたの」

わたしはカバンから書類を取り出してお母さんに見せた。

その様子を見ていたお父さんも駆けつけてくる。

「テニス……。ね。あら、この近くなのね。あんた大丈夫？ できる

の？」

「いいじゃねえか！ 瑞奈がやりてえつつつてんだから。瑞奈！」

お父さんは、瑞奈がそれで青春できるってんなら全力で応援するぜ！」

「そうねえ……。何かやるのもいいかもね。せつかくこうしてやる気になってるんだし。……。でも、ちゃんと勉強もするのよ？ いいわね？ せつかく成績いいんだから」

「うんっ！ ねえ、やってもいいんだよね!？」

「ああいいとも！ 瑞奈！ 青春するんだぜえ！」

「や……。やったあ〜！ お父さん大好き〜!!」

「あらあら、この子ったら」

思わずお父さんに抱きついたわたし。嬉しさをこらえきれなかった。

翌日の学校帰りに、あのテニススクールに行き、書いてもらった書類を出そうと受付を探す。

「あれ〜？ ここさっき行ったよ……。えっと、現在地がここだから……」

地図を頼りにあたふたと歩いていると、曲がり角で誰かとぶつかる。その相手は……。優香お姉様だった。

「あら？ 瑞奈ではございませんか」

「お、お姉様！ ぶつかっちゃってゴメンナサイ……。てへへ。あつ、受付はどこですか？」

「受付ですか？ もしかして、昨日お渡しした書類をお書きになったのでしょうか？」

「あ、はい！ それを出したいんです」

「そうでしたか。それでは一緒に向かいましょう」

「はっ……。はいっ!!」

わたしはお姉様の服のすそを掴んでいた。お姉様も初めは困って

たけど、わたしが離さないからあきらめたみたい。

1分ほど歩いたところで、わたしたちは受付……というかお姉様が直々にこのオーナーの所に連れてつてくれた。わたしはドキドキして冷や汗かいちゃった……。

「失礼します」

「はい、どうぞ。……おや、南野さん。お疲れさん」

お姉様に連れられて入ったオーナーの部屋にはたくさんの賞状やトロフィー、メダルなどが飾られていた。それだけこのスクールが優れているという事ね……。

「そちらは？」

「彼女が昨日お話しした入会希望者です。……どうぞ、書類です」

「ありがとうございます。……せっかくだからちよっと話そうか。ま、座りなよ」

「はっ、はい！」

わたしはガチガチになりながらも、オーナーに勧められるがままに腰を下ろす。

「お名前は？」

「橋本……瑞奈ですっ！」

「橋本さん……ね。どうしてここに入ろうと思ったのかな？」

「あの、えっと、お姉さ……あっ、優香さんに憧れて……」

「憧れ。それはどういった？」

「優香さんは昨日、猫ちゃんを川に流されていくのを助けてくれたんです。その優しさに憧れて……というか、そんな優香さんと一緒にいれば、わたしも強くなれるかな……っ」

「そうかそうか、なるほどね。……あ、だから昨日ビショ濡れだったんだね」

「ええ……。ご迷惑をおかけ致しました」

「ああ、いいよいいよ。……さて橋本さん。ここに入りたいたいという事だけど、頑張れますね？」

「もっ、もちろんです！ お姉様の為ならどんな事だって頑張れま

す！」

「でしたら大歓迎です。……では、正式にあなたの入会を認めましょう。……はい、判子押しました。これをご両親に見せてあげてくださいね」

オーナーが書類に判子を押したと同時に、わたしはお姉様の方を向いた。お姉様は、わたしに小さく微笑みを返してくれた。や……やっただあ〜！！

「じゃあ、今日のところは見学していくといい。……南野さん。もしアレなら試し打ちさせてあげてね」

「はい、わかりました」

こうしてわたしは、晴れてお姉様の所属するテニススクールに入れる事になりました。

「ねー瑞奈、最近いい顔してんじゃないの。何かあった？」

「うん！ はあ……うっとり……」

「……げ、キモっ！」

「あのさ……かおりゅん、帰りって空いてる？」

「え？ ヒマっちゃヒマだけど、なに？」

「よかった！ じゃあさ、ちょっと付き合っほしいんだけど……いい？」

「う、うん。いいよ」

わたしがHexagramの存在を知ったのは、初めてお姉様と練習をした日。

マスターがいい人だし、来る人も面白い人ばかりだから、お友達のかおりゅんにも知ってもらいたかった。

……でもかおりゅんは、わたしより先にここの存在を知っていたみたい。

「あ、なーんだここか！ おねーちゃんとかとよく行くよ。瑞奈も行ってたんだ〜」

「う……うん」



「そんじゃ入ろっ！」

「うん！」

かおりゆんと並んでカフェに入ると、いらっしゃいってというマスターの優しい声が聞こえてくる。

……いつもの光景だった。いつも通りの、幸せな時間が始まる合図だった。

引っ込み思案で、なかなか最初の一步が踏み出せなかったわたしだったけど、かおりゆんと出会い、お姉様と出会い、マスターと出会い、カフェのみんなと出会い……。

それら全てが、わたしをいい方向へと導いてくれた。いろいろな意味で、強くなれた気がした。

わたしは……こんな素敵なおみんなと……絶対に離れたくないの……。

みんなとこうして一緒にいられる事がわたしの幸せであり、わたしが一番居心地がいいと思える瞬間だから。

だからみんな……。ずっとずっとわたしと一緒にいてね……。お願いします……。

……てへっ。なんか最後ちょっぴりしんみりさせちゃったね。

それじゃ……。わたしはこれでおしまいです。

## Chapter 7：対決！ 六角形星人

はいはいー！ ではミーのターンですねー。

ミーのストーリーは、涙なくしては語れない一大感動巨編かもです。

おひまなら聞いてよね、です！

「ありがとございましたー！」

お店のおねえさんの声を聞きながら、ミーは本屋さんを出る。

新刊が出たから買ったちゃったです。『ぴゅあとら！』っていう本を。

ミーは、これが出るのを首をキリンさんにして待っていたです。

……何年かぶりに帰ってきた、ミーの生まれ故郷である日本からは、ミーの知ってたものがみーんななくなっちゃったです。

当たりの入ったガムを教えてくれたおばさんのいたコンビニは、お魚屋さんに。

名前も知らない子たちとどろんこになって遊んだ公園は、おつきなおうちに。

だけど、それでも残り続けるものはあるです。そのうちの1つが、本です。

いつだったか、ミーが自分の生まれた国である日本の言葉を忘れちゃわないようにとマミイが買ってくれたものが、日本の文庫だったです。

ミーはたくさんたくさん本を読み、ちゃんと忘れなかったです。

そのうちにミーは、マミイやパピイの本を読ませてもらうようになったです。

その中に見つけた『ぴゅあとら！』を書いている人が前に書いてた作品がミーの心にかっつりフィットしてしまって、それで今はこれ

を読んでいるのです。おもしろいのです。

これっていわゆる『作者買い』っていうんですね、そうですね。とても楽しみだったので、ミーはお店を出たと同時に読みながら歩いたです。

そしたら……いきなり誰かがミーにぶつかってきましたです。いたいですー！

「あうちっ！ いたいですー！」

「あ……と、すまねえです！ ……でも、本読みながら歩くのはあぶねーですよ？」

「えと……ミーが悪いですか？」

「（げ、もしかして日本語わかんねーのか……？）あーっとつと、そ、そーじゃないです。オレっちも走ってたからいけないんです」

「ありよ？ お互いに悪い子です？ じゃあじゃあ、悪い子同士で握手するです！ それで仲直りですー！」

ミーは、今ミーにぶつかってきた男の子の手を取って動かす。

その男の子はなんだかお顔を赤くしていました。ははくん、これが『顔から火が出る』ですね。

「あ、オレっち原田海斗っていうです。そっちは？」

「ミーですか？ ミーは桜庭クリステルです。クリスって呼んでくれると喜ぶです」

「うっわ、やっぱりハーフですか！」

「はーふ？ えとえと……ラマーズ法？」

「それは『ひっひっふー』」

「違うですか……。えとえと……国会とか？」

「それは『政府』……でいいんですかねえ」

「ありよ？ これも違うですか……。えとえと……」

「あーっ！ もう漫才はたくさんです！ えつと、学校は？ そっつだよ、さっきからこれ聞きたかったんだよオレっちは……」

「学校は……まだです。来年の4月、高校2年生から割り込むです

けど」

「来年の4月から高2……？あつ！　ってことはオレっちと同じじゃないでっすか！」

「わお！　かいとくとミーはタメです！」

「た、タメって……。まあ、確かにそうだけどさ……。あ、クリスちゃん。これからなんか用事とかあるでっすか？」

「ようじ？　えとえと……」

「待った！　そのパターンはまたさっきみたいに漫才に持っていくつもりでしょ！？」

「ありよ？　さっきみたいにしておしかったですか？　ミーは今、この後の予定が何かあるか思い出していたところでしたです」

「がっ……。す、すまねえでっす。……んで、実際のところどうでっすか？」

「えとえとですね、ミーは暇人さんでした！」

「よかった！　じゃーさ、オレっちの友達にも紹介してーから、ちつとオレっちと一緒に来て欲しいでっす」

「わー、わー！　ミーは今まさにナンパされてるです！　これがナンパですか……。未体験ゾーン突入です！　緊急事態です！」

「だああ！　違うでっすって！　お、オレっちはナンパなんて……って、この状況じゃ確かにそうだ……」

「のんのん！　いっつあじょーくね！　ばいざうえい、どうするでっすか？　ミーを連行するでっすか？」

「れ、連行……。あーもう、じゃあそれでいいでっすよ。ほら、こちでっす」

かいとくんはミーを連れて、すたこらさつさと歩いていったです。

何分か歩いたところで、かいとくんは足を止める。

着いた所は……カフェでした。お名前は……へきさぐらむ？　日本語で言つと、六角形。

……ミーは謎を解いたです。　ここは、遠い宇宙からやってきた

六角形星人にしんりやくされてるですね!? かいとくんはそんなカフエを助けるためにミーに声をかけたですね!

「かいとくん! ゆーの気持ちはわかりました! ミーと一緒に、六角形星人をやっつけるです!」

「……は?  
「とーっ!」

ミーはカフエのドアを開けるとすぐに大声を出す。

「こらー! 六角形星人! どこに隠れてるですか!? おまえたちは完全に包囲されてるです! 神妙にお縄につきやがれです!」

「ちょ、クリスちゃん! 何言ってるんでっすか!?!」

かいとくんが何か言ってるけど、六角形星人を倒すって使命に燃えたミーには聞こえなかつたです。

……その時でした。奥から大きな男の人が現れ、ミーと目線を合わせながら話しかけてきました。

「いらつしやいませ。何になさいます?」  
……こいつだ、こいつが六角形星人! ミーは精いっぱい抵抗をします。

「優しいふりしてもミーは騙されません! こら六角形星人! 覚悟するです!」

「六角形星人? ……ああ、そういうことか。……そう、確かにこの僕が六角形星人だよ」

「やっぱりそうです! ミーの目に狂いはなかつたです! 悪者宇宙人め、覚悟するです! えいやあ〜!」

ミーは六角形星人に飛び掛ろうとした……けど相手は見上げなくちゃお顔が見えないくらいのっばさん。そんなのに頭から押さえつけられちゃつたらなんにも出来ないです……!

「わはははは! 地球防衛軍の精鋭というのは、こんなものなのか? その程度じゃ、この六角形星人は倒せないぞ〜?」

「えとえと……。かいとくん! そんなところでボケボケしてないで一緒に六角形星人と戦うです!」

「……なんでこうなるんですかね……?」

ミーはかいとくと共に六角形星人と戦う事にした……その時、ミーの後ろでドアが開けられる。

「あ、お客さんだ。海斗くん、お遊びはここまでだよ、その子連れで奥のテーブルに座ってて。……いらっしやいませ」

「わかったでつす！ ほらクリスちゃん、行くでつすよ！」

「何するですか！ 六角形星人をほつといていいですか……むくむく……！」

ミーはかいとくに口をふさがれながら、店の奥のテーブルに座らされた。

「ぶはっ……。何するですか！」

「だーからー……六角形星人って一体何のことですか!?!」

「あのおつきなヤツのことです！ あいつがこのお店にしんりやくしてきたから、かいとくんはミーを選ばれし使者としてここに連れてきたですよね!?!」

「ちーがーうーっての！ まったくマスターもマスターでつす。お客がいねーからってノっちゃうから……。あ、マスター」

「お客がいけないからってノってごめんねえ。でも、せつかくその子が楽しんでるのにそれを終わらすのもかわいそうかなって思ったわけだ」

「来たな六角形星人！ 覚悟するです！」

「はいはい、こんな格好した宇宙人がどこにいますか？ 僕はこのカフェのマスターで、名前を増田六つていいます。……お嬢ちゃんの名前は？」

「ありよ……? えとえと、ミーはもしかして勘違いしてたです……か……?」

「その通りでつす。六角形星人なんてどこ探してもいるわけねーでつす」

「ほっほあ〜。ミーはまた勘違いしてたみたいですね。……すんませんでしたっ！ えとえと、ミーのお名前は桜庭クリステルという

です！ クリスと呼ぶと喜ぶです」

「そうか、クリスちゃんだね。よろしくね」

六角形星人……じゃなかった、ますたーさんはミーの手を取り、少しだけ動かした。

……さつきかいとくんによってあげたことを先にされたです。

「ういーっす！ 今日も寂しく一人で来たぜい！」

そう言いながらお店の中に誰かが入ってきたです。

ますたーさんと同じくらい背の高い人で、男の子なのに髪の毛を結わいてたです。

「おつやあ？ 誰さその子。新しい子入ったんだ」

「新しい子ってキミ、ここをキャバクラかなんかと勘違いしてないか？ ここはカフェだよ。そしてその子は……海斗くんの彼女さ」

「ぶー……！……！？ ちょ、マスター！ いきなり何を言  
い出すでっすか……！」

「ほう？ くおらバ海斗！ この大先輩の圭輔様を差し置いて先にランデブーするとは何事だ貴様！ そこに直れ！ 成敗してくれ  
る！」

「マジ頼むでっすよ。違っんでっすから！ クリスちゃん！  
なんか言ってくれでっす！」

「えとえと……。なんか？」

「ちっがあ……う……！」

「そうか、キミはクリスちゃんって言うんだな。オレの名前は秋野  
圭輔。……どうだい、今なら間に合う。こんな奴じゃなくてオレと

……」

「えとえと……。ミーはかいとくんとは今日初めて会ったばかりで  
す」

「なんだと!? 会ったばかりでいきなり告ったのかてめえわっ！

みさきが聞いたら怒り狂うな……」

「ぞぞ……。こ、怖ええこと言わねえでくれでっすマジで……。

つてか！ オレっちはクリスマスちゃんに告白した覚えはねえです！  
「なんだよ、つまんねーの。だったら最初っからそう言えっつての」「  
「言ったじゃないですか……。圭輔さんが面白がって飛躍させっ  
からこうなるんですよ」

「わーるかったよ。んでもさ、お前おちよくってんの楽しいしさ」

「がっ……。人をおもちやにしやがって……。！」

「えとえと……。放置プレイしないでほしいです」

「……。あーっと、キミの事をほっいたらかしにしちまった。ごめんよ  
ー」

「よよ……。ミーはうさぎさんなんです。うさぎさんは、心が寂し  
いと泣いちゃうです……」

「だああああ！！ ごめんよークリスマスちゃん！ ほら、ほっとかな  
いから！ 何か頼む？ オレ奢るよ！？」

「あー、じゃオレっちも……」

「失せる小僧！」

「ひでえ！」

「わーいわーい！ おごりですー！ けいすけさんありがとーです

ー！ Hug！ー！」

「んぶっ！？」

「んげっ！？」

ミーは嬉しくなっけていすけさんに抱きついちゃったです。これ、  
ミーのくせみみたいです。

あっちだどぐつもーにんのあいさつと一緒にやってたのに、どう  
やら日本だと普通じゃないみたいです。

「や……。やーらけえ……。！ あひい……」

「ゲゲ！ 圭輔さんがっ！ マスター！ マスター！！ 圭輔さん  
が大変ですすー！！」

「うわ、これは重症だ。……。待つてな、氷水持ってきてやるから」

ミーのハグで、けいすけさんは倒れちゃったです。えとえと……。

ミーは悪くないですよね？



結局ミーも、このカフェによく行くようになったです。

なんでみんなここが好きになるんだろぅ……と思った時もあったけれど、考えれば考えるだけおばかさんでした。

だって、みんながいますから。仲良しのみんながここにいますから。

考える必要なないです。そのうちミーは、考えるのをやめました。

ミーは日本に帰ってこられてすごくよかったです。向こうにはこんなに仲良くしてくれる子はいませんでした。

だからもう、どこにも行きたくないのです。

みんなと……ずっとずっと一緒にいたいのです。

ぶれしやすなめるでいを、ずっとずっと奏でていきたいです。

みんな……同じ事思ってるはずです。……ね？

……さて、ミーのお話はいかがだったですか？ 感動したですか？  
しなくてもいいのです。どう思つかは、人それぞれです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4205o/>

---

Precious Melody -2nd Stories- (番外編)

2011年1月11日23時13分発行